HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学病院における精神科作業療法（第2報） ： 施設認可取得及び大学病院精神科での特色
Author(s)	大宮司, 信; 上野, 武治; 宮川, 佳子 他
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 7, 73-80
Issue Date	1994-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37577
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_73-80.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

原　著

大学病院における精神科作業療法（第2報）
——施設認可取得及び大学病院精神科での特色——

大宮司　信・上野　武治・宮川(寺門)佳子*
伊藤ますみ**・市川　淳二**・山下　　格***

Psychiatric Occupational Therapy in a University Hospital(Part 2)
—— With Special Reference to the Official Acquisition of its Establishment Approval and Some Characteristic Features in a University Hospital ——

Makoto Daiguji, Takeji Ueno, Keiko Miyagawa(Terakado)*
Masumi Itoh**, Junji Ichikawa** and Itaru Yamasita***

Summary

With respect to the practice of the occupational therapy at the Depertment of Psychiatry of Hokkaido University Hospital, this is a repert of the course up to the officiai acquisition of its establishment approval and of the contents of its prescriptioncompared with the psychiatric occupational therapy in a mental college hospital.

In 1991, Hokkaido University Hospital obtained the first time among national and public university hospitals in japan.

The prescribed cases at the Depertment of Psychiatry of Hokkaido University are characterized first by an increasing prevalance of manic-depressive psychosis compared with 4 years before, partially because of an increasing number of manic-depressives among inpatients and of a decrease in prescription rate for schizophrenia and secondly by higher prescription rate for manic-depressive psychosis and neurosis then schizophrenia, compared with a mental colloge hospital, presumably because of a higher rate for inpatients, on the hand and a higher prescription rate for neurosis, on the other.

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科
＊北海道大学医学部附属病院理学療法部
＊＊北海道大学医学部附属病院精神科神経科
＊＊＊北星学園大学社会福祉学科
Dapertment of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University
＊OTR of Depertment of Psysical Therapy, Hokkaido University Hospital
＊＊Depertment of Psychiaty and Neurology, Hokkaido University Hospital
＊＊＊Depertment of Social Welfare, Hokusei Gakuen University

要　　旨

北大病院精神科における作業療法の実践について，施設認可を取得するまでの経過，単科精神病院の精神科作業療法との処方内容の比較を行った。北大病院では平成3年(1991年)，全国国公立大学医学部附属病院で初めての精神科作業療法の施設認可を得た。

また北大精神科における対象症例の特徴をまとめると，第1に，4年前とくらべ躁うつ病圏のしめる割合が増加してきたこと，その理由の一部として，入院患者の中にしめる躁うつ病圏の割合が増加したこと，精神分裂病に対する処方の比率の減少があげられる。

第2に単科型の精神病院とくらべると，精神分裂病にくらべ，躁うつ病圏，神経症圏に対する処方の率が高く，これは，入院患者の割合が高いことにもよるが，神経症圏での処方の率が高いことも一因と思われた。

1．はじめに

精神科治療の一部としての精神科作業療法（以下精神科ＯＴ）の役割の重要性は，すでに周知のことであるが，医育機関である大学病院，とくに国公立大学医学部附属病院では，種々の制約から，研究的，試行的なものはみられるものの，認可を取得し診療報酬を受けて活動するまでには至っていない場合が多いのが現状である。北海道大学医学部附属病院精神科神経科(以下北大精神科）でも以前から精神科ＯＴが試みられていたが[1]，最近認可を取得し，診療報酬を得て活動することとなった。そこで，前報[1]以後の活動から，大学病院精神科における対象症例の最近の変化や単科型精神病院と比較した時の特徴を中心に報告する。

2．対象と方法

平成2年（1990年）5月1日から1年3ヶ月間の北大精神科における精神科ＯＴ処方症例を分析し，それと比較する目的で，札幌市の某単科病院（Ａ病院，仮称）における同じ時期の成績，および4年前の昭和61年(1986年)7月1日から約2年6ヶ月間の北大精神科における成績を，精神科ＯＴ処方患者数，疾患名，年齢などの点から検討した。なお統計的検討は母比率の差の検定を用いた。

3．結果ならびに考察

平成2年（1990年）5月1日から1年3ヶ月間に，北大精神科で精神科ＯＴの処方が出された症例は39名であり，この期間の入院患者の11％に相当する(図1)。ＯＴ処方時の病棟は開放，閉鎖，ほぼ同数で(図2)，入院後1～3ヶ月間に処方されるのが最も多かった(図3)。また精神科ＯＴの実施期間は1～3ヶ月間が最も多く，比較的短期間に終了していた（図4)。

年齢別にみると，各年齢層にわたっているが，40歳台の中年層に多いのが目立つ（図5)。

疾患別（全ＯＴ処方を各疾患別にみた割合）にみると，精神分裂病が多いものの，躁うつ病圏，神経症圏の比率もかなりある（図6)。

次に，この疾患別の比率を，4年前の2年6ヶ月間における，同じ北大精神科での成績と比較してみた。その結果4年前にくらべ，躁うつ病圏の症例の処方が統計的に有意に増加している。また精神分裂病では減少していたが，統計的には有意差はなかった（図7)。

こうした結果が何に由来するかについて考えるため，この2つの期間における入院患者の比率をしらべたところ，躁うつ病圏では4年前にくらべ有意に高くなっていた（図8)。

また各疾患別に精神科ＯＴ処方の出された比率（各疾患の中のＯＴ処方の出された割合）をみると，精神分裂病で有意に低くなっていた(図9)。

次に，北大精神科での最近の成績を，札幌市のＡ病院（仮称。単科精神病院）における同じ時期の成績と比較してみた。精神科ＯＴ処方症

例数を各疾患別の比率でみると，北大精神科では精神分裂病の占める割合がひくく，躁うつ病圏及び神経症圏の占める割合が有意に高くなっていた（図10）。

このちがいの原因を考えるため，先に示ししたのと同じように，入院患者の疾患別比率をみた。北大精神科では精神分裂病のしめる割合が低く，躁うつ病圏，神経症圏が高いことがわかった（図11）。

また疾患別に精神科ＯＴ処方の出される比率をみると，北大精神科では神経症圏で有意に高いことがわかった（図12）。

以上から，北大精神科における精神科ＯＴの対象症例の特徴をまとめると，第1に，4年前とくらべ躁うつ病圏のしめる割合が増加してきたこと，その理由の一部として，入院患者の中にしめる躁うつ病圏の割合が増加したこと，精神分裂病に対するＯＴ処方の比率が減少したことがあげられる。

第2に単科型の精神病院とくらべると，精神分裂病にくらべ，躁うつ病圏，神経症圏に対する精神科ＯＴ処方の率が高く，これは，入院患者の割合が高いことにもよるが，神経症圏での精神科ＯＴ処方の率が高いことも一因と思われた。

次に大学病院における精神科作業療法の認可状況についてのべる。全国の大学病院では，平成3年（1991年）12月まで表1に示す4ヶ所のみが認可されており，北大は5番目，国公立大学病院としては我が国ではじめて認可された施設となった。今回（平成6年6月現在）新たに全国各都道府県に問い合わせて調べたが変化はなかった。

またこの当時（平成3年12月1日現在）の北海道における精神科作業療法の認可状況を表2に示す。この時点では18施設（精神病院中の14%）であったが，現在（平成6年6月30日現在）では33施設（同26%）に増加している。

ここで参考までに精神科作業療法の現時点（平成6年6月現在）における認可状況についてふれておきたい。図13は認可施設の実数を示す。北九州地区に多く，ついで北海道，京阪地区に多い。図14はこの実数のその地区の精神病院数に対する割合である。地域ごとに差はあるが，全体として大都市圏よりも，地方に高い割合を示す傾向があるように思われる。

作業療法士の需要は最近とくに高まっている。一方，優秀な作業療法士の育成[2]のためには，その教育プログラムの中で比重の大きい臨床実習が重要であるが，多くの大学附属病院精神科では施設認可を得ていないため，精神科ＯＴについては臨床実習が出来ない状態である。多種類の医療ならびに福祉関係の有効なシステム[3][4]化がのぞまれている現在，そこで活動するマンパワーの充実がのぞまれるが，作業療法士の育成に関しては，精神科ＯＴという断面でみる限り，正規の臨床実習を大学病院で行えるための認可の取得が重要である。

北大病院においては前報[1]にも記したように，かなり以前から精神科ＯＴが試みられていたが，その範囲・内容が拡大・深化するうちに，まず病院内の正式な診療部門として公認される必要が出てきた。ここで精神科の中の部門とするか，それとも理学療法部門の中の一部として活動するかの討論も若干あったが，北大病院の中の作業療法士の人事構成，将来のリハビリテーション部門の発展を考えれば，当然後者のような道を選ぶべきであり，そうした方向でいくつかのステップを踏み昭和61年（1986年）2月，理学療法部運営委員会で正式に精神科ＯＴの活動が認められたが，これが今回の施設認可にとって大きなステップになったといえよう。

一方ここ数年前から北大精神科教室の賛同を得て精神科の初期の研修医を対象に，精神科ＯＴについてのクルズスの他，実際にＯＴ場面に参加してもらい，その後第1線の病院へ出て研修するためのそなえをしてもらっている。これは第1線病院における障害者の社会復帰活動に

精神科医がたずさわっていくときの，精神科ＯＴとの協力関係の基礎の一部になるものと期待される。

4．ま　と　め

北大病院で行われている精神科作業療法の現状，認可の状況，さらに大学病院における展望などについて報告した。

今回報告したような躁うつ病圏，神経病圏の精神科ＯＴの比重の増加は大学病院に限らず，総合病院精神科でも予想され，従来の，いわゆる慢性分裂病を主体とした形態からの変化がうかがえる。

また作業療法士の教育や，精神科研修医との交流なども大学病院ではじめて可能なところと考える。このような教育場面での初期の交流は精神医療のシステム化の基礎の一端になるものと考え，さらに検討をつづけていくことが望まれる。

謝　　辞

この活動を認め育てて下さった北大医学部附属病院理学療法部長，金田清志教授をはじめ理学療法部の方々にお礼を申し上げたい。また歴代の同部の作業療法士の方々に感謝申し上げる。資料の整理・統計学的検討(及びコンピューター・グラフィック表示）については村松　宰教授（本学看護学科）のご指導・ご協力をいただいた。記して感謝を捧げたい。

本論文の要旨は第88回日本精神神経学会総会（1992年），及び第80回北海道精神神経学会（1991年）にて発表した。

文　　献

1）大宮司　信，上野武治，石田真奈美，角　哲雄：大学病院における精神科作業療法の試み。北大医短紀要，第6号，11－22，1993

2）浅井邦彦：作業療法の現状と教育。臨床精神，23：797－803，1994

3）豊田勝弘，深井光浩，上田ゆかり，他：精神保健・福祉・医療のシステム化をめざして――総合病院の立場から――。精神経誌，94：1131－1137，1992

4）高橋尚武：精神保健・福祉・医療のシステム化をめざして――精神病院の立場から――。精神経誌，94：1138－1144，1992

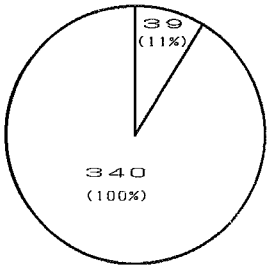

図１　入院患者中の精神科作業療法処方の出された者の割合

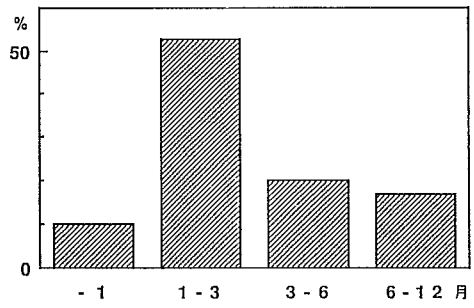

図４　作業療法実施期間

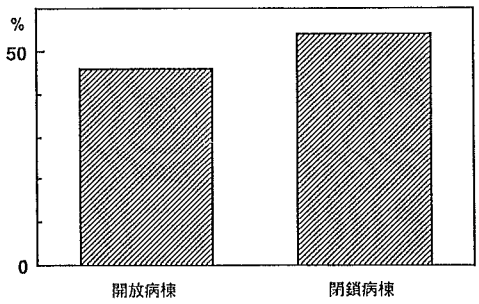

図２　作業療法処方時の病棟

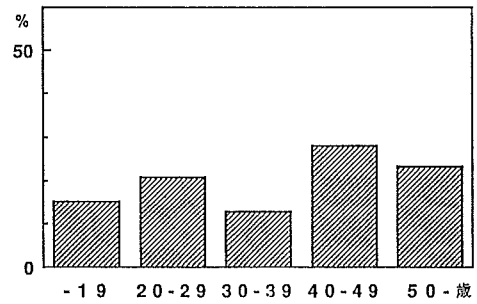

図５　年齢別の患者割合

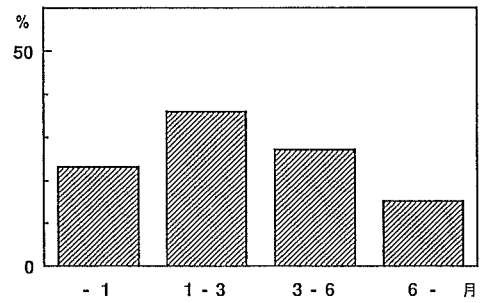

図３　入院から作業療法開始時までの期間

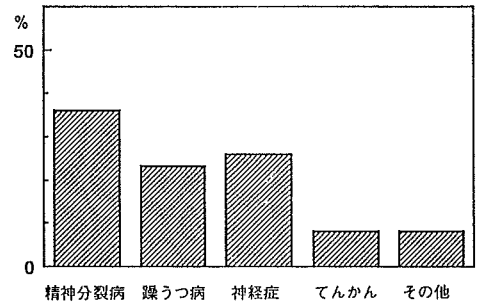

図６　疾患別の患者割合

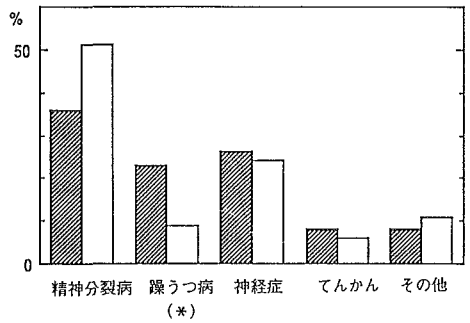

図7　精神科作業療法処方の4年前との比較
（斜線は平成2年時、白抜きはその4年前の昭和61年時。*：P＜0.05以下にて統計的に有意）

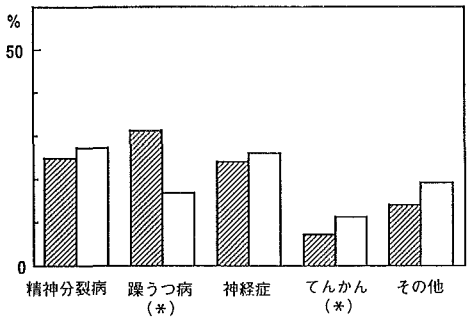

図8　入院患者の疾患別比率の4年前との比較
（表示は図7と同じ）

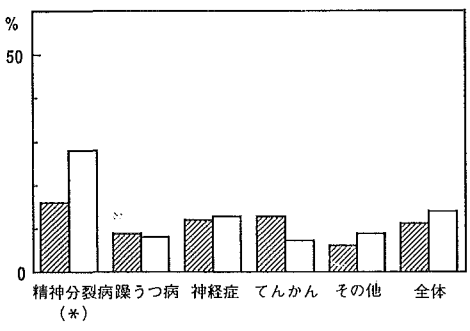

図9　疾患別の精神科作業療法処方の比率の4年前との比較
（表示は図7と同じ）

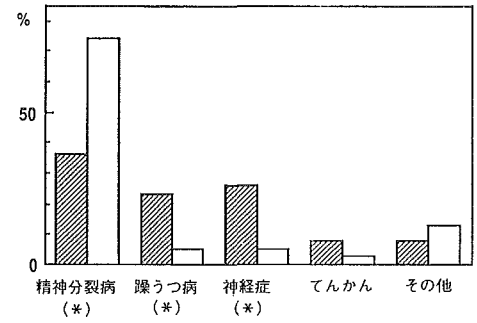

図10　北大と某単科精神病院での精神科作業療法処方の疾患別比率の比較(斜線は北大、白抜きは某単科精神病院。*：P＜0.05以下で統計的に有意)

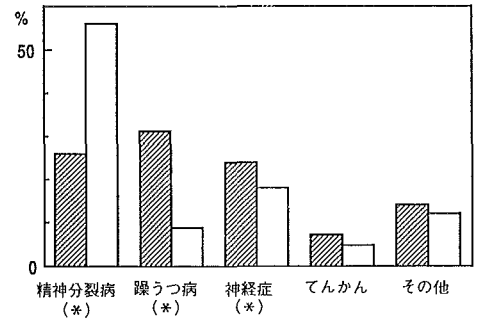

図11　北大と某単科精神病院との入院患者の疾患別比率の比較
（表示は図10と同じ）

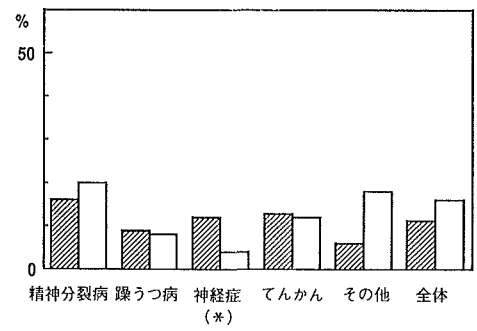

図12　北大と某単科精神病院での精神科作業療法処方の疾患別比率の比較（表示は図10と同じ）

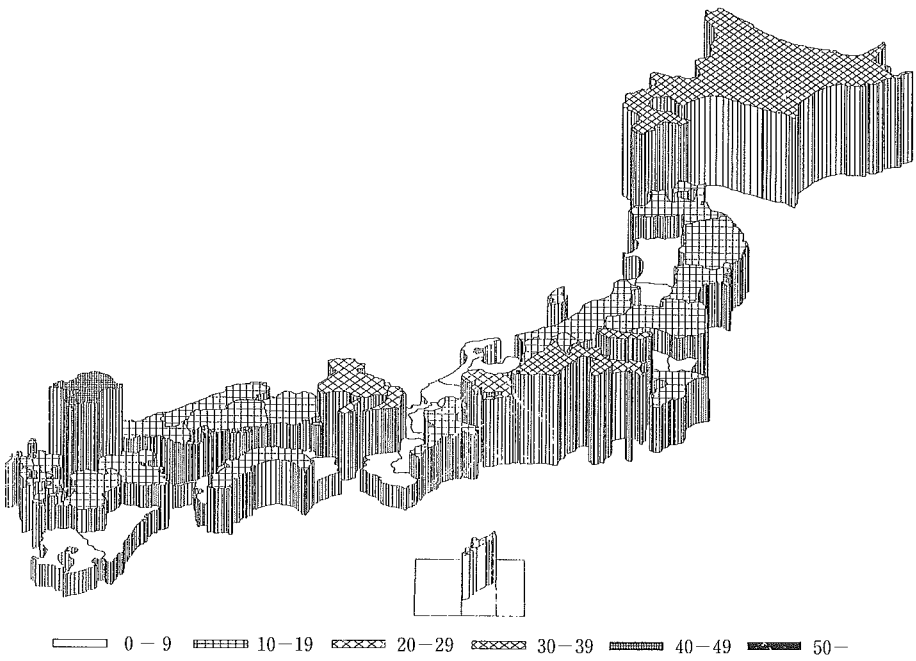

図13　全国の精神科作業療法の施設認可状況（実数）

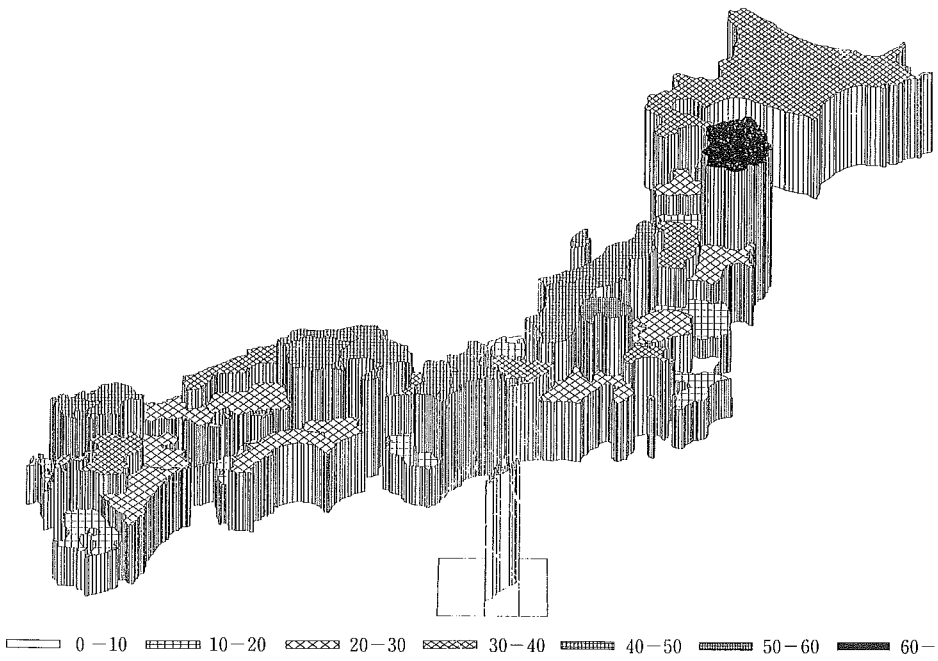

図14　全国の精神科作業療法の施設認可状況（精神病院に対する割合）

表1　大学病院での精神科作業療法の認可状況（平成3年12月1日現在）

1．昭　和　医　大	昭和49年 2 月
2．福　　岡　　大	昭和49年 2 月
3．東京女子医大	昭和60年 8 月
4．北　　里　　大	昭和62年 1 月
5．北　　　　大	平成 3 年11月

表2　北海道における精神科作業療法の認可状況（平成3年12月1日現在）

	病 院 数	OT認可施設
単科的な精神科	94	9
併設的な精神科	36	9
(大学病院)	(3)	(1)
(合　計)	130	18